#四章 履歴書こそ金髪で

第四章 简历上要用金发

#一晩っても答えは出なかった。

四十七想了一晚上也没想出结果。

#　なぜが現れたのか。

为什么会出现眷属？

#　ヴァンパイアは絶滅していないのか。

吸血鬼还没有灭绝吗？

#　にヴァンパイアハンターの情報を開示したことは正しかったのか。

自己把吸血鬼猎人的事情告诉盛黄琉花真的好吗？

#　教室の最後方からホワイトブロンドの後頭部を見つめる。机にをつき、眠たそうにしている。昨日の事件のせいで寝付けなかったのだろうか。心配ではあるが、どう励ましていいのかわからないし、そもそも人を励ますことには慣れていない。

从自己这教室后方看去，只能看到盛黄白得刺眼的脖颈。她用手撑着脸，好像睡着了。多半是昨晚的事情让她睡不着了吧。虽然有些担心，但四十七也不知道该说点什么好。说到底自己本来也不怎么擅长安慰别人。

#　盛黄琉花はが相対したことのないタイプの少女だった。

盛黄琉花则是个和银华完全相反的女生。

#　人に優しく、人を信じやすく、人のトラブルを解決するために積極的に行動する。少々判断が軽いところはあるが、盛黄が善人であることは疑いようがない。

待人温和，乐于相信他人，也会积极地帮助陷入麻烦的人。虽然人有些轻率，但她肯定是个好人。

#　そんな彼女が怪物に襲われた。

这样的好人却被怪物袭击了。

#　この町には自分以外の狩人はいない。狩人同盟には事件の連絡をしたが、返答がくるには少し時間を要するはずだ。

这块区域的猎人只有自己。虽然自己已经就这件事情联系了猎人同盟，但大概还要一些时间才能收到回信。

#　気が引き締まる。この事件は自分だけで解決するしかない。常に気を張り、を解明するために全力を尽くすべきだ。

要打起精神了。这件事情只能靠自己解决。保持清醒，接下来要全力以赴，解决谜题。

#「し、さん？」

“四，四十七同学？”

#　顔を上げると、ぎこちない笑いを浮かべた男性が立っていた。

四十七抬起头，看到一个男人站在旁边，正在从脸上挤出一些尴尬的笑容。

#　印象の残らない容姿に落ち着いた色のスーツ。下っ端ヴァンパイアが好むような周りに溶け込みやすい格好。もしかすると彼がそうなのだろうか。

让人留不下印象的样子，和深色的西服外套。一身下等吸血鬼十分喜欢的非常容易融入环境的打扮。他不会就是下等吸血鬼吧。

#「あ、あの……も、問題に……答えて……」

“那，那个……请，请你……回答一下问题……”

#　銀華が見つめていると男性は笑いを引っ込め、申し訳なさそうに体を縮めた。

银华看过去之后，男人收起了笑容，像是做了什么亏心事一样有些瑟缩。

#　弱者を装って同情を誘うのも下っ端ヴァンパイアが好む手法だ。やつらの卑劣さを思い出すと怒りがれ出しそうになる。

以软弱的表现骗取同情也是下等吸血鬼喜欢的手法。四十七一想起他们的劣行就忍不住有点生气。

#「え、ええと……」

“同，同学……”

#　男性はうろたえるばかりで、状況を変えるような行動を起こすことはなさそうだった。

男人看起来很迷茫，不像是会做出什么不得了的事情的样子。

#　それもそうだ。彼はただの数学教師であり、ヴァンパイアではないのだから。

那是当然的啦。因为他只是数学老师，并不是什么吸血鬼。

#　そもそもヴァンパイアが日中に活動できるわけがない。気を引き締めすぎた。

而且吸血鬼本来也没办法在大太阳下活动。自己这是紧张过头了。

#「失礼しました。もう一度ご質問をお願いいたします」

“不好意思。可以再讲一次问题吗？”

#　銀華がえると、数学教師はあからさまにほっとした表情になった。

听到银华的回应，数学老师顿时露出了如释重负的样子。

#

#　　　　◆　　　◆　　　◆

◆　　　◆　　　◆

#

#　四十七を昼食に誘おうと琉花が立ち上がった時、教室に彼女の姿はいなかった。

琉花才刚站起来，准备邀请四十七一起吃午饭的时候，教室里已经找不到四十七的身影了。

#　周りを見回すと、同じく中腰になっているちなみと目が合った。琉花が手をひらひら振ると、ちなみは恥ずかしそうに縮こまってすとんと席に座った。

环顾一圈，琉花与和自己一样正在揉着腰的速水七海对上了视线。看到琉花朝她轻轻地挥了挥手，七海像是有些害羞一样缩回了自己的座位上。

#　ま、イツメンで食べますか。

算了，还是找好姐妹一起吃吧。

#　琉花がめいりの机にランチバッグを置くと、めいりが不思議そうな表情になった。

看到琉花把午餐袋子放到自己桌子上，芽里瞪大了眼睛。

#「あれ、今日はコーバイ行かないの？」

“今天不去\*吗？”（疑似是校内的小卖部？）

#「あそこいつも混んでっから、しばらくやめてみるかーってひなと話したんよ」

“之前日菜不是说暂时不想过去了吗，毕竟那里总是挤满了人”

#「あー、そーいうこと……で、琉花、それが昼？」

“啊—，是这样啊……呃，琉花，你中午吃这个？”

#「そだけど？」

“有什么问题？”

#　琉花が取り出したコンビニおにぎりと紙パックのミルクティーを見て、めいりは険しい顔になった。

看到琉花从袋子里拿出来便利店的饭团和纸盒装的奶茶，芽里的表情有些扭曲。

#「中学時代から思ってたけど……あんた、よく甘いもん飲みながらおにぎり食べれんね」

“其实初中的时候我就想说了……你喝着甜的东西还真能把饭团吃下去啊”

#「え、しいと美味しいで倍美味しいっしょ」

“诶，美味加美味，这可是美味双倍”

#「おばかの掛け算だよそれ」

“这是什么傻瓜乘法”

#「掛け算だけは得意なんよ」

“我只有乘法比较擅长嘛”

#　めいりのツッコミにドヤ顔を返しつつ、紙パックにストローを突き刺していると、ひなるがピンク色の弁当箱を持ってやってきた。

琉花一边做出一个得意的表情回敬芽衣的吐槽，一边用吸管扎向奶茶盒。这时，日菜提着一个粉色的午餐盒走了过来。

#「ジャマするも～」

“打扰嗼~”

#　ひなるが弁当箱を開くと、ミニハンバーグやミニコロッケが顔を出した。めいりのサラダづくし弁当とはまったく真逆の内容。流石ダンス部、高カロリーを求めているらしい。

日菜打开午餐盒，里面装着的是小份汉堡肉和小份的可乐饼。和吃沙拉的芽衣截然相反。不愧是舞蹈部，真的是很需要卡路里的样子。

#　箸を取り出したひなるの前に、琉花はラムネ菓子の容器を置いた。

#「るかちん、なんこれ？」

#「昨日ひなにもらったっしょ。それのお返し」

#「あ、そーゆーことか。そんならいただくも」

#「ん。エンリョなく食べちゃいな」

#「うすうす……そんで、るかちん朝からなに隠してんの？」

#　なにげない言葉に固まる。

#　ひなるとめいりがじっとこちらを見つめている。不穏な空気が漂っている。

#「なんで今日シャズネルのバッグ持ってきてるも？　スクバどしたん？」

#「これは……たまには、気分変えたくて……」

#「そーいや、琉花、見たことないネイルしてるね。それどこで買った？」

#「これっ、これーはー……ネット。ネットで、昨日、あ、いや、一昨日、頼んだ」

#　琉花がたどたどしく返事をしていると、

#「こんなバレバレなことある？」

#「琉花はが下手だからね」

#　こちらの精神性はふたりに把握されているらしい。

#　やばい。バレる。針千本飲まされる。

#　琉花がに助けを求めていると、

#「朝もいきなり四十七さんに会いにいったし、あの人となんかあったでしょ」

#　めいりが核心をつくようなことを言い出した。

#「べ、べべ、別になにも！　なにもないっすよ！　うん！」

#「こりゃ絶対なんかあったね」

#「さっさと話して楽になるも」

#　ふたりが生温い表情で迫ってくる。追い詰めるというよりも、琉花の葛藤をがっているようだ。こうなれば、

#「うお……おおーっ！」

#　雄叫びを上げながらおにぎりを口に放り込み、それをミルクティーで流し込む。に力を入れて、甘々な味を一気に飲み込んでから、

#「トイレェッ！」

#　琉花は勢いよく立ち上がると、ひなるの腕をき飛ばして教室の外に飛び出した。

#　こうなったら逃げるしかない。

#　後ろから、お手洗いって言いなー、と聞こえたが無視をした。

#

#　教師たちの、走るな、という注意を受け流しながら、廊下を爆走していると、向こう側に銀髪美少女の姿が見えた。

#　ナイスタイミング！

#「四十七さぁーん！」

#「……盛黄？」

#「緊急事態っす！　ヘルプヘルプ！　ヘールプ！」

#　琉花が近づいていくと、なぜか四十七は琉花の頭に手を回し、ぎゅっと抱きしめた。

#「うぷっ」

#　豊かな胸に包まれて息が詰まる。なにすんの、と抗議しようとすると、無理矢理姿勢を低くされた。首が痛い。

#　四十七は素早く周りを見渡すと、体に薄い祓気をまとい始めた。

#「どこだ？　どこにいる？」

#「ど、どこって、なにが？」

#「やつらだ。接敵したんだろう？」

#　四十七の猛犬のような表情を見て、琉花は気まずさに包まれた。

#　琉花の救助要請があまりに迫真だったせいで、四十七は琉花がヴァンパイアと出会ったと勘違いしたらしい。

#「あーと、四十七さん……そのー……」

#　琉花が誤解を解く言葉を探していると、四十七がきまりの悪そうな表情を浮かべてゆっくり手を離して言った。

#「ヴァンパイアに襲われた……わけではないのか」

#「うん…………つか、ヴァンパイアって昼間はいないんじゃなかったっけ」

#　琉花が昨日聞いた知識を引き出すと、四十七はますますきまり悪そうな顔になった。

#「それは、そうだが……では、なにがあったんだ？」

#　誤解が解けたことにしつつ、琉花は『緊急事態』のことを思い出した。

#「それが大変なんすよ！　昨日のことでめいとひなに突っつかれてぇ！」

#「もう少し声を抑えてくれ」

#「……めいりとひなるに昨日のこと探られて……いつもと違うバッグとか、いつもと違うネイルとか指摘されて……んで、ついさっき気づいたんすけど、あたし、噓つくのすんごい苦手らしくって……」

#「君、昨晩は口が堅いと言っていなかったか？」

#「勘違いでしたさーせん！」

#　琉花が謝罪すると、四十七はれ顔を浮かべ、腕を組んで思案し始めた。

#「共通のカバーストーリーを考えておいたほうがよかったか……」

#「かばーすとーりーってなんすか？」

#「本当の事情を隠すためのつくり話だ。任務で新しい町に行った時は、引っ越しや旅行と言ったものだが……ここでは使えないな……ム……」

#　四十七は昨日の事件を隠すために噓の話を作ろうとしているらしい。

#　これならあたしでも協力できそうだ。

#「んじゃ、シュミが一緒だったとかどう？」

#「君と私の趣味が合うとは思えないが……」

#「そーかな？」

#　琉花が聞くと、四十七は気まずそうにいた。

#「私たちはお互いのことをよく知らない。下手なカバーストーリーはを生む。かえって危険を呼ぶことになるかもしれない」

#「なーほー……じゃ、お互いのことはこれから知りまくるっつーことで置いておいて……どーっすっかなー……」

#　四十七と自分が知り合う経緯はなんだろうか。

#　お互いのことを知らないのならば偶然出会ったことにするしかない。ただ、その場合も出会った場所が問題となる。

#　出会った場所について意見を求めようと四十七を見ると、彼女は琉花を不思議なものを見るしで見つめていた。

#「ど、どした？」

#「いや、そうだな。どうするべきか……」

#　ごまかすようなその様子は少し気にかかったが、今はカバーストーリー作成を優先するべきだと思って追及はしないことにした。

#　その後、ふたりは話し合いの末、昨晩のカバーストーリーを作り上げた。

#『昨日の夜、琉花がアルバイトの帰り道で転び、スクールバッグが破れてしまった。

#　偶然通りがかった四十七が代わりのバッグを貸してくれたが、その中に海外のネイルの試供品が入っていた。

#　四十七に連絡したところ、勝手に使ってもいいということだったので、今日は塗ってきて、朝見せびらかした』

#　無理矢理すぎる気もするけど、今はこれでヨシ！

#

#

#　放課後。琉花は学校を飛び出して『ビアンコ』に向かった。

#　今日はシフトがない日だったが、授業終わりにマスターから『今日シフトのスタッフが風邪を引いたので、臨時で入れないか』と連絡が来たので出勤することにしたのだ。臨時なので時給も少し上がるらしいし、稼ぎ時だ。

#『ビアンコ』に到着し、マスターの礼を聞いてから、スタッフルームで給仕服を身につける。今日はときわがいないので少ししいが、それも仕事だと割り切る。

#　力を入れすぎでもなく、抜きすぎでもなく、ほどよい調子でホール作業をこなしていると、入店のベルが聞こえた。

#「らっしゃせー。何名様すかー？」

#　くだけた口調で対応すると、男性客はドアのそばで立ち止まり、琉花をじっと見下ろした。

#　あ、やべ、キレた？

#『個性を活かす』という店主夫婦の方針に従い、琉花はいつもの態度で接客しているが、客からすればそんな方針は知ったことではないし、失礼な対応と思っても仕方がない。

#　さくっと謝っとくか。

#　そうして琉花が謝罪の言葉を考えていると、

#「あ、あのっ……ぼ、僕……」

#　中年男性は声を詰まらせると、顔を赤くしてうつむいた。

#　顔や耳に血が上っているが、怒っているようには見えない……恥ずかしがっている？

#「ん？　んー……？」

#　黙っていることをいいことに、相手をじろじろと眺める。

#　毛の手入れをしていないのか、の間ががり、顔のいたるところからが生えている。太った体に身につけたＴシャツはがたるみ、色あせたデニムパンツはかなりの年季が入っている。

#「あ！　昨日のおっちゃん！」

#　この男は昨夜、琉花をストーキングしてきた男だ。

#　眷属の出現や四十七のこともあって忘れかけていたが、この様子を見ると、彼も無傷で逃げ切ることができたようだ。

#「やー、お互い無事でよかったっすねー」

#　琉花が気楽に言うと、中年男が顔をくしゃくしゃにませた。

#　え、なに？

#　える琉花の前で中年男が口を開くと、

#「ご、ごべん……よ……ぎ、ぎびをおいで、にげぢゃっで……」

#　つぶらなから涙がぽろぽろとこぼれだした。

#　大人の泣き顔って怖いな……。

#「いやいや、あれはしゃーないっすよ。だってビビるって」

#　ヴァンパイアハンターいわく、ヴァンパイアや眷属は怪物だ。

#　本業の四十七ならまだしも、一般人が太刀打ちできる存在ではない。そんな相手から逃げ切れただけでもラッキーだ。

#「ワケあってなにがあったかは言えないんすけど、あたしは今もバリバリ働けてるし、おっちゃんが悪いわけじゃないし、変に気にするヒツヨーないって」

#　あ、でもストーカー行為は悪いか。

#　琉花が別の犯罪について言うべきか迷っていると、

#「ぼ、僕……ちゃんっ、ちゃんと就職するからっ！　そ、そしたらもう一回ここに来て……もう一回君に謝りに……さ、さよならっ！」

#　中年男が大量の涙とともに店を飛び出していった。

#「お、おお～、就職頑張って～？」

#　からんからんと店のベルが鳴り、気まずい空気が流れる。カウンターのマスターから、なにお客逃してんの、という視線を感じる。

#　今のはあたしのせいじゃなくない？

#　眼力でマスターに対抗しつつ、ホール作業に戻ろうとすると、再び入り口のベルが鳴った。

#「らっしゃ……あれ、四十七さん？」

#　入ってきたのは四十七銀華だった。

#　彼女は銀色の髪をたなびかせ、いつもの静かな表情で琉花を見つめている。

#「君の友人たちにアルバイト先を聞いた。落ち着いた雰囲気のいい店だな」

#「お、あざっす」

#　礼を言いいつつマスターを横目で見ると、店を褒められたことがしいのか、彼は笑みを浮かべていていた。四十七の容姿に驚く様子がないのは年の功というやつなのか。

#　四十七は入り口のドアをゆっくり閉めて、

#「盛黄。今日のアルバイトは何時ごろに終わるんだ？」

#「九時までだけど……え、なんで？」

#「それは……いや、とりあえず座席に案内してくれないか」

#「あ、そだね。一名様ごあんなーい」

#　急な訪問を不思議に思いつつ、四十七を窓側の座席に案内する。

#　座席に西日が差し込んでいたので、琉花がカーテンを閉めていると、後ろから小声で話しかけられた。

#「昨日も言ったが、君はやつらにわれる可能性が非常に高い。夜に出歩くことは自分の身を危険にすことと同義だ。それをよく覚えておいて欲しい」

#　四十七がここに来たのは琉花に忠告をするためらしい。

#　確かに彼女の言う通り、ヴァンパイアの活動時間に出歩くことは危険を高める行為だ。自分の命を守るのならば夜のシフトにつくべきではない。

#　彼女の意見は正論だ。

#　正論だが、受け入れることはできない。

#「や、でも働ける時に働かないと服とかコスメとか買えないし」

#「そういったものと命。どちらが大事か考えてくれ」

#「いざって時は命だけど、普段はどっちも大事だし」

#　琉花の答えを聞いた四十七は、しばらくなにか言いたそうに口を開閉していたが、そのうち腕を組んで座席にもたれかかった。

#「やつらのせいで日常生活を送れなくなることも問題か……」

#　納得しているわけではないが、それ以上説得する気はないらしい。端的に言えば、呆れている。

#「事件が解決するまで私が護衛につく。夜遅くのシフトになる時は連絡してくれ」

#　その提案は予想外だったが、嬉しいものでもあった。夜道の安全が保証されるし、会話相手がいれば楽しく帰れる。琉花にとっては文句のつけようがない提案だ。

#「君にとっては迷惑だろうが、我慢して欲しい」

#「え、ゼンゼン迷惑じゃないっすよ。つか、四十七さんと帰れるの嬉しいし」

#「ム……」

#　四十七はそう呟くと、ふいと顔をそらした。昼間の廊下で見た動きとよく似ていたが、なにを意味するのかはわからなかった。

#　そんな謎な四十七を琉花は笑顔で見下ろして、

#「あの～、で、いいっすかね？」

#「いいとは、なにが？」

#「や、ここ喫茶店なんで、なんかチューモンしてもらわないと」

#「え……ああ。すまない」

#　四十七は机上のメニューを手にとり、中身を眺め始めた。

#　店内の温かい明かりが彼女の肌を照らし、顔の輪郭をたせている。宝石のような銀色の瞳はメニュー上をのようにさまよい、琉花の胸をそわつかせた。

#「ちな、あたしのおすすめはチーケね。うまさが他の店のバイチっす」

#　もどかしさに耐えかねて提案すると、四十七は、ふむ、と一拍置いてから、

#「チーケとはチーズケーキのことか。バイチ……バイチ？　バイチとはなんだ？」

#「倍くらいレベルが違うってこと。マスターの奥さんが元パティシエでさ。その奥さんが考えたレシピ使ってんの。なんで、うますぎでほっぺ落ちまくり」

#「ふむ……では、ベイクドチーズケーキとオリジナルカプチーノを」

#「あざっす」

#　四十七からメニューを預かってカウンターに戻り、マスターに注文を報告する。

#　報告がてら四十七とのやりとりを伝えると、マスターは複雑そうな顔になった。どうやら自分のコーヒーよりも妻のチーズケーキが注文の決定打になったことが気に入らないらしい。

#　お、大人げねー！

#

#　午後九時。琉花は四十七とともに帰宅していた。

#　日は沈んでいるが、街灯の明かりでは薄く、隣には四十七がいる。それらのこともあって琉花は肩から力を抜いて歩いていた。

#　そんな琉花とは反対に、四十七は瞳を忙しなく動かしていた。ヴァンパイアや眷属が出てきた場合に備えて警戒しているらしい。

#　敵が出たらまたあの不思議パワー使うんかな……。

#「あんさー、あのギンギンのやつってあたしには使えないの？」

#　琉花の質問に、四十七は瞳だけ動かして応じた。

#「ギンギンとは、のことか？」

#「そそ。あれ使えればあたしもヴァンパイアと戦えるっしょ。だからどーなんかなって」

#　興味半分本気半分の割合で琉花が聞くと、

#「祓気は手術と修行によって修得することができる。貯蔵量や出力量は個人の適正で変わってくるが、人間であれば基本的に誰でも修得できる」

#「んじゃ、あたしでも……」

#「だが、やめておいたほうがいい。祓気の修得には多大な労力と時間を要する上に、ヴァンパイアハンターの戒律に従うことを誓わなければならない」

#　琉花が、かいりつ？　と繰り返すと、四十七は静かに頷いた。

#「戒律とは狩人が守るべきだ。その内容は多岐にわたるが、代表的なものとして、『ヴァンパイアハンターであることを明かしてはいけない』『ヴァンパイアのことを話してはいけない』『祓気を悪用してはいけない』などがある。時代に合わせて更新されるので、『公的な大会やメディアに出演してはいけない』『ＳＮＳを利用してはいけない』なども」

#「あ……無理っすね、それ」

#　琉花の口から拒否反応が飛び出した。

#　少しの秘密を抱えただけであれほど追い詰められたのだ。ヴァンパイアハンターの戒律なんて守れる気がしない。

#　四十七は冷たい表情で戒律についての説明を続ける。

#「戒律違反を犯した狩人は狩人同盟によって罰されることになっている。更生不可能と見なされた場合は手術によって祓気をされ、記憶を消去される」

#「えっぐぅ……」

#「私も過激だとは思うが、個人が強大な力を持てば悪用することは目に見えているし、軍事活動などに転用されて人間同士の争いを生む危険性もある。不自由なルールは必要不可欠だ」

#　戒律とはヴァンパイアハンターの暴走を防ぐためにつくられたルールであるらしい。

#　昨日の銀華と眷属の戦闘を思い出して戒律の必要性をなんとか受け止めようとしていると、琉花はあることに気がついた。

#「あれ？　それだったら、あたしに色々バラしたのってだいぶやべーんじゃ？」

#　琉花の疑問に、四十七は肩をすくめることで応えた。

#「緊急事態下では例外処理が適用される。なので、ある程度は弁解の機会がもらえるはずだ……いずれにしろ応援の狩人が来てからの話になる。君が気にすることではない」

#　平静で応える四十七を見て、琉花は納得できない気分に包まれた。

#　四十七銀華はこれまでヴァンパイアと戦ってきた。うっすらとについたが表すように、きっと一筋縄ではいかない戦いだったはずだ。

#　そんな過酷な日々を送ってきたというのに、なんの報酬を与えられることもなく、むしろ戒律を破ったことへの言い訳を考えなければいけないなんて。

#「あんさー、四十七さんってなんでヴァンハになったん？」

#　琉花の質問に、四十七は形のいいをひそめた。

#「ヴァンハとはヴァンパイアハンターのことか？　どうしてそんなことを聞きたがる？」

#「や、なんかさー……ヴァンハってさー……うまく言えないけどさー……」

#　もやもやした感情が言語化できず、口ごもってしまう。

#　だが、言語化できないままでもいい気がした。素直に話せば、ヴァンパイアハンターやその制度を否定してしまいそうだ。それは四十七自身への否定にも繫がってしまうため、口に出すことはできないし、したくない。

#　琉花がもどかしい気持ちに包まれていると、

#「私は祖母の意志を継ぐためにヴァンパイアハンターになった」

#　四十七の言葉に少しだけ安堵を覚える。少なくとも誰かに強制されてヴァンパイアハンターになったわけではないらしい。

#「祖母は自分の夫がヴァンパイアに殺害されたことを契機に狩人の世界に足を踏み入れた。そして彼女は夫を殺したヴァンパイアにを遂げると、怪物から人々を守護することに身命を捧げた……私はその姿にれて、祖母に弟子入りすることにしたんだ。両親には猛反対されたがね」

#　混じりの声を聞いて、琉花は四十七がひとり暮らししている理由を察した。

#　琉花には四十七の両親の気持ちも理解できた。ある日突然、娘が怪物たちと殺し合いたいなどと言い出したので当然のごとく反対したら、娘はそれを振り切って祖母に弟子入りし、戦いの世界に身を投じてしまった。おそらく四十七の両親は今もどうすればよかったかわからずに悩んでいるに違いない。

#　やはりヴァンパイアハンターという制度には引っかかりがある。

#　命を危険に晒しているのに戒律という鎖に縛られて身につけた力を自由に使うことができない。家族との関係も崩壊する。損ばかりだ。

#「だが、私は狩人である自分を誇りに思う」

#　琉花が顔を上げると、四十七銀華がこちらを見つめていた。

#「誰がなんと言おうと狩人同盟の『の人々を守る』という理念は正しいし、私が狩人になったことで救えた命もある。なので、私は狩人になってよかったと思っている」

#　琉花は彼女から目が離せなくなった。

#　規則正しい歩調で歩き、肩で気持ちよく風を切っている。美しく気高い銀色の狩人。

#　彼女のことを知れば知るほど心が安らかに、穏やかになっていく気がする。

#「……頑張ったんだね」

#　琉花が心からの称賛を告げると、四十七はなぜか顔をこわばらせた。

#「ヴァンパイアと戦うのは狩人としての使命であるし、やつらを撲滅できたのは狩人同盟の組織力があってこそだ……それに、今は生き残りを見落とした疑いもある。とても頑張ったとは言えない」

#「いやいや、四十七さんは偉いって。すげー技使えるし、そーいうのを自慢してないのもかっけーし、マジリスペクトだって」

#「祓気は狩人ならば誰でも使用できる。技を自慢しないのは戒律を守っているだけだ」

#「いやいやいやいや」

#　琉花がしつこく否定すると、四十七は硬い表情のままそっぽを向いた。

#　テキトーとか思われた？

#　そう思って四十七を眺めていると、あることに気づいた。

#　耳が少し赤らんでいる。

#「もしかして……恥ずがってる？」

#　琉花がそう言うと、四十七はいきなり歩幅を大きくした。

#　四十七を追いかけて彼女の顔をき込もうとすると、さっと顔をそらされた。顔は見えなかったが、その行動が琉花の指摘が正解だということを示していた。

#　琉花の口にいやらしい笑みが浮かぶ。

#「おいおいおい。かわいーじゃんよー。ぎんちゃーん」

#「……年上には敬意を払え」

#「うーわ、今さら年上アピとか。おなクラなのに」

#「おなクラ……？」

#「おんなじクラスってこと。友達友達！」

#　琉花が前に行くと、四十七が恥ずかしがって前に行く。琉花がさらに前に行くと、四十七はそれを察して足を踏み出す。そんなやり取りをしていると、あっという間に周りの景色が過ぎていった。

#　少しくらい止まってくれてもいいのに。

#　そんなことを考えつつ、琉花は家につくまで四十七との追いかけっこを続けた。

#

#